

守護神 ゴーレス

第6話 後編
『戦争のための機械』
WAR PIGS

作：みかつきなお

挿絵：ぜんざいナオミ

本気であるのは、こちら側であるかのように見せかけ
る。

桂田さんがフォワードで、俺がバックアップと見せる。
足つき魚が腰をかがめた時がチャンスだ。

魚が、すこし腰をかがませる。持ち上がるまでの数秒が
チャンスだ。

舜はワイヤーガンを発射した。ナポレオンの右肩に向
け打ち込んだ後、ワイヤーガンを放り投げ、左側の肩に向
け、加速した。ワイヤーガンと並行して走り、さらに追い
抜いた。

「このスピードだ、ゴーレス！ 飛びつくぞ」

ナポレオンの背中に取り付いたゴーレスは背びれをむし
りとろうとした。

その時、背びれの骨部分が一齊にゴーレスに向かって飛
んできた。

「え……何？」

そして大爆発が起こった。赤い炎と爆発の煙の中にゴー
レスが消えた。

「弱点なんて、俺がわかつてないと思つてたのか。氣の利
いた改造してよかつたよ。ざまあ」
柏木には想定内の攻撃だった。

「舜っ！」

工場のメンバーはあっけにとられた。裕一は叫んだ。

「あの爆風では絶対壊れない。あの装甲は水圧にも戦争に
耐えられるんだ」

爆発した煙の中からゴーレスは現れた。

まったくの無傷。舜は体表センサーをスキヤンしたが、
題のある損傷はない。

「やつた。あの漫画のような背びれミサイルに勝つた！」

工場では歓声が上がった。

「……怒った。ゴーレスの装甲が勝ったんだ。ドリルをお

見舞いする！」

舜は背びれの空いた部分にドリルを突っ込もうとした瞬
間、尾びれの激しい振りにゴーレスは弾き飛ばされた。海
に転がりこむゴーレスの手をリザードマンがひっぱった。

「大丈夫か？」

「大丈夫です。あまり揺れてませんから」

「お前の機体も揺れないのか？」

桂田は気がついた。リザードマンとよく似たコクピット
のデザイン。

わざとらしい無骨な計器類に、アールデコ調のゆるやか
な曲線を配したクラシックなデザイン。一種の趣味とい

えるものが共通するということは何かある。

まあいい。それは戦いの後で聞けばいい。

しかし俺は、戦いの後は……。

「暗い顔ですよ。後ろにいてもわかります」

「気にするな。それより、オペレーターの役目、ありがと

うよ」

振り向き、少しあはかんだ荏田に貴子は笑顔で答えた。

ゴーレスは立ち上がり、舜は単機でまたアタックをかけようとした。

ミサイルに負けなかつたんだ。まだやれる。

「さて、舜。正面に気をつけろ。腕の付け根にも重機関銃が格納されているはずだ。加えて、鉄砲がなくともあいつはいろいろ出来るんだ。あいつはまだまだ隠し玉があるということだ」

「はい。気をつけます」

荏田は確信をもつていた。リザードマンとゴーレス2体と対峙する状況は計算外だ。

もうそろそろ、《ワントールド》のいつもの手口なら援軍が現れる。水中か？ 空か？

その時、舜と荏田はローター音とともに、青い空にサフ

アイアブルーの機体がはるか上空を舞うのを見つけた。

カーソルを移動。拡大。

リザードマン・イヒカだ。

シャツにネクタイ姿の兼光社長が現れた。

「やあ、泥棒君。うちの社員と商品、返してくんない？」

「それより兼光。てめえ、誘拐された女の子を助けるのを

手伝え」

「出来る限りのことをしてしましよう。でも君の機体は接続全面カットしたから動くはずないんだけど。違法海賊版アブ

リで動かしているようだねえ。発売記念特別価格3億4980万円分、我が社でタダ働きすれば君を法的に問わないってのは、どうなのかね」

「改造したのは私です。社長、私、退職しますからほっといてください」

「社長、彼女は俺が洗脳したうえで、やらせてますからね、お咎めなしでお願いする」

「ちょっと、荏田さん」

兼光はため息混じりに笑った。

「あーあ。つり橋効果の男女ならでは、だねえ。いちやついているうちに君達がボニー＆クライドみたいになつて欲

しくないから、手を考えてあげているんだ。そういうして
いる間に、空自と陸自も来たよ。任せてみたほうがいいん
じゃないの。無理はやめようぜ』

那覇空港から離陸した飛行船が、アクチュエーター機降
下部隊を乗せて上空に現れた。

うるま市ホワイトビーチから出港し、本島東海域の沖合い
10kmで待機するは、深部工作用アクチュエーター機アラ

スカ2-1を中心とする、米軍特殊作戦軍アクチュエーター機アラ
実験中隊からの極秘通信。

ベラード大佐。私見では、あのヨロイファイターは大地
のエナジーと繋がる『ヨリシロ』です。奴はグレイツスピ
リツツだv

へあまり向こうに肩入れするな、ウイラード中尉。君はハ
イエストの仕事を静観する立場なのだv

長髪のネイティブアメリカンの男、ウイラード・リーダ
ーは沸きあがる能力が起こす大きな波を感じていた。この
波が、大きな力を發揮すると予言できたが、大佐には報告
しなかつた。

ここは沖縄人の聖地、俺は手を出せない。俺は神に罰を
受ける立場にはなりたくないのだ。

ウイルは百名ビーチから湧き上がる大地の気を感じ取つ
ていた。

首相官邸では情報集約センターでまとめられた情報を伊是
名総理が目を通していた。

彼の個人秘書に、総理は怒りをあらわにした。

「今朝の読谷の件を小手先でうやむやにしたのはどこのど
いつだ」

「警察内部で、たらいまわしにした結果かと……」

「警察内部ではなく、桐丸内部だろうが。兼光め、どこま
で権力をおもちやにする。桐丸グループの状況を政府が把
握してないことが問題なのだ。襲撃する海賊よりも我々の
敵は桐丸そのものだ。」

「総理。御自分の選挙区は桐丸の城下町ですよ」

「私は本来引退する年だ。連立与党に入り込まなければ、
沖縄初の総理の椅子も手に入らなかつた。選挙よりも、義
を通す。これが政治生命最後の改革だ。沖縄の魂を守る王
家が自らの聖地を汚すとはバチあたりな」

イヒカは海を見下ろす丘の上に着陸し、兼光は高見の見物
をすることにした。

橋製作所の最新鋭機の活躍を眼にする機会だと思った。そしてとどめに自分達の部隊を投入する筋書きを描いていた。

兼光は秘書橋桐江を呼び出した。

「おい、リザードマン部隊はまだ用意できなきいか?」

「待ってください。うちのテストパイロットはヘリアクチュエーター初心者です。そもそも工業用である重工製品と防衛省納入の橋製品を組み合わせることは想定外です。いま練習中ですので速めにそちらへ向かわせます」

「プログラム上では可能なようにしてあるんだ。こういう非常時のためだよ。みんなプロだろ、ちゃんとやつてよ」

兼光は相次ぐ想定外に非常に苛立っていた。

空からの援軍を二人は見た。飛行船降下部隊だ。

「騎兵隊の到着だな、舜」

「彼女を助けてます」

「で、俺も捕まりやすくなつたか」

貴子は唇をかみ締めた。

飛行船の航空輸送は70年代から見直され、今では様々な分野で活躍している。

8機の陸自アクチュエーター機を吊り下げて那覇空港か



ら飛んできた飛行船はボーアイニング＝ツエッペリン社、航空輸送用飛行船BZ-99『白鯨』だ。

アクチューーターの空輸は空自と広域自衛隊がそれぞれ陸自、海自と組むことで、輸送効率向上を目指して実験的演習が行われてきたが、初の緊急出動となつた東太平洋大震災以来、各地で演習が行われたが、災害以外で初の出動となつた。

裕一達も、大型アクチューーター機の登場に安堵した。

「橋製作所TD-20『ハヤブサ』」だな。ついに日本の本気が見られたよ。『ハヤブサ』が編隊でかかれれば、大丈夫だ

高空の飛行船から分離した『ハヤブサ』がパラシユートで降下してきた。

15mの体高に人型の脚部を持ち、尾部ランサーを持つ、5年前からの準人型アクチューーターの代表格。そして、機関砲を4門装備した実戦のための戦闘アクチューーター機。

海に着水した『ハヤブサ』は、腰まである深さを前列2

体、中列4体、そして後列2体のフォーメーションで徐々にナボレオンへと接近した。

しかし突然水柱が上り、後列の『ハヤブサ』が突然海中

に消えた。

急いで陸に上がるようとする中列の4機が次々と倒れ込み、足に触手が刺さり水中を引きずられる様を舜たちは確認し、陸側へ機体を移動させた。

うまく逃げた『ハヤブサ』2機は、陸側南に退避した。沖合いのサンゴ礁の波立つ際で、引きずられた『ハヤブサ』の手足が浮かびあがるのを舜は見た。野獣が巣に引っこみ、足に触手が刺さり水中を引きずられる様を舜たちは確認し、陸側へ機体を移動させた。

「なんだ、これ……。どんな敵がいるんだ？」

舜が画像を拡大すると、突然緑のボディの大型のエビが現ってきた。

「辰巳さん！ あれ、アラスカではないよね」

工場では水面から垣間見るエビ型の拡大画像を確認した。

「これは初めて見る。エビっぽい古代生物アノマロカリスに似ている。しかしどうかいな。おそらく全長50はある」「50m？」でかすぎます。それにしても、なんて戦闘力だよ」

ちょうど同じ頃到着した県警機動隊のアクチューーター機が到着した。

大型二足歩行鳥型アクチューーター機KW-301『タンチ

ヨウ々一機、中型二足歩行鳥型アクチュエーター機 KW-205P 《ヘラサギ》 4 機。

対アクチュエーター機捕縛用ワイヤー機器を多数搭載した編成だった。県内にある警察アクチュエーター機でも、最強の編隊で来たものの、現状の自衛隊の敗北に皆あぜんとした。

ナボレオンの攻撃から助かった和宇慶警部補は隊長に進言した。

「怪我人もでているし、我々には太刀打ちできませんよ」

隊長ほか機動隊員は見守るしかできなかつた。

ナボレオンのモニターに、ストレートの長い髪の、一重まぶたのクールな顔立ちのアジア女性の顔が映つた。

「おいこら柏木同志 早く退却しろよ」

女は片言の日本語でヒステリックな声を上げた。

紫のバイロットスーツはボディラインがわかる、ボディコンシャスな素材のようだつた。

「リ・ヨンヒ。ぶつ壊しそぎだ。念願の自衛隊との初対決ではしやいでいるのはお前だ」

「昔の思想的クセだよ。国は捨ててもあるんだよ。柏木同志、すでに本来のシナリオから違うオプスをしている。娘はさらつた。お前は帰るべきだよ」

「ハワントワールドの仕事、あの工場から出てきた機体を持ち帰る。お前がいればたやすいことだ」

「ほらふき男爵の仕事はもうお断りだね。金より理想のあるハイエストの命令ね。早く娘よこせよ。」

「まで、裏切り者の岸田を処分させる。俺の仕事を全部させろ」

「ふん。じゃああのヨロイ型を15分で捕縛してここまで持つてこい。アノマロカリスに陸に上がりというのか」

「わかつた。俺なりにやってみる」

モニターのヨンヒは敬礼をして画面から消えた。

「真面目なみなさんなのに、仕事を間違えたようですね」

みづきがぼつりと言つた。

「うるせえ、お前はこれからどうなるのか怖くないのか」「結果よりも今出来ることに興味がありますから」

「素人の能力者は下手に神懸かっていやだな。能力なんぞ、ただのパンチ力なんだよ」

みづきは気持ちを切り替えて、この人たちに平常心でいて欲しいと思つた。

破壊された8機の《ハヤブサ》のバイロット達は機体から脱出し、救命ボートに乗ることが出来た。陸に退避した《ハヤブサ》のバイロットから連絡が来た。

「荏田さん。元広自第3アクリ中隊の鵜飼（うかい）です。

今は第11機動警備大隊副長三等陸佐であります。」

「鵜飼ひさしぶりだな。さて俺はおたずねものだが、どうする」

「荏田さん。あなたの身柄に関しては上からの命令待ちです」

「どうせ自衛隊の上も、桐丸の息で動いてるんだろ。とりあえず葦原みずきさんの救出作戦を立てよう。敵は常識はずれだ。現場で判断するしかない」

「僕が行きます。またさつきの作戦を行うなら」

舜が強い口調で言った。自衛隊の人も来ているんだ。男らしく戦わなくては。

「舜、一番たしかなことがある。お前の装甲が一番頑丈だ。さつきの作戦を行う。」

「船越！ 11機警の意地をみせるぜ」

「鵜飼さん。無念を晴らしましょ。伝説の広自1アクリの荏田さんがいるんだから」

「鵜飼。俺は広自のハザラスタンでの事件をマスコミに公開する用意がある。それでもいいか」

「はい。公式発表と事実が違います。彼らの無念と業績を明らかにすることは、今の自分では無理です。荏田さんが

やるなら……お願いします」

「よし、ポーツマス6ナポレオンを活動不能にし、人質を解放する」

オーメーションを組み、作戦行動に移った。ゴーレスとリザードマンの通信画像は、八幡アクチュエーター重機のメンバーにリンクされていた。荏田の登場に複雑だったのは、今日子だった。

荏田の計画では、桐丸重工襲撃後に今日子に接触し、情報を渡す予定だった。しかし失敗に終わったことにより、今日子は荏田に会うこと出来なかつた。今日子はスクープを手に入れることよりも、ハザラスタンで出会つたこの男をどうしても取材したいという気持ちが強かつた。

まだチャンスはある……。荏田さんに会いたい。ジャーナリストとしての欲望。それだけの気持ち。あくまでそれだけ。

プロとして一線を越えない、今日子の気持ちだつた。工場から直接来る情報を、他社より詳しく記事にまとめていった。

「舜、一番たしかなことがある。お前の装甲が一番頑丈だ。さつきの作戦を行う。」

那覇の牧志にある自宅にて、八幡幸賢は大型モニターで見る荏田の顔に釘付けだった。

「この話し方、この表情。まさしく葦原茂敏の生まれ変わりじや」

そして幸賢は眼鏡をかけて、細かい数値の変化を見続けていた。

パソコンに送られてくる、ゴーレスの循環蒸気システムの順調な稼動状況。

生涯の仕事の成果に、老人はただただ満足した。

戦いに不安を感じる姿を時々垣間見せる舜の様子を見て、アナログコードが壁を占拠する部屋から稲田は応援のエールを送った。

「舜！ いよいよ大詰めだな！」

パイロットゴーグルを被り日の丸のハチマキを巻いた稻田の姿に、舜は全身の力が抜けた。

なにやつてんの……。

「稻田さん、作戦行動中です。切りますよ」

「ちょ、ちょっとまた。お前の思いきりを強くする方法がこれだ。」

「音楽ファイルを受信しました。再生しますか？ Load or cancel>

「音楽ファイル？」

表示に従つて再生させると、ハモンドオルガンのシーケンスフレーズが聞こえてきた。

「巨大ロボットと対決するならこれだ！ エマーソン・レイク&ペーマーの『タルカス』だ！ 僕ができるることはこれだけだ！」

「と、とりあえずこれでやる気をだしてみる。ありがとう」

「上運天曹長、勝利を願う！」

敬礼した稲田が消えた。舜はタルカスのボリュームを上げて聞いた。

なんか、やる気が出てきた。

硬くならずに気分転換が必要だ。よし、作戦開始だ。

先ほどと同じく、ナポレオンの正面に布陣し、リザードマンの上昇とともに陸側にゴーレスは駆けていった。

「早いぞ、舜！ 早く取り付け！」

裕一は大声で応援した。新たに加わった二台の《ハヤブサ》は斜め左右からナポレオンの足元を狙つて機銃掃射しつづけた。

弾が途切れずに攻撃が続く分だけ、ナポレオンを足止めする効果は大きかった。

「インディーズがよく作る人型アニメロボットと思つたら足速いな。船越」

「しつぽ無しがコケずに『ハヤブサ』を超える速さ！ ホントにインディーズですか、荏田さん」

「ぐだぐだ考えるな。奴に動く隙をあたえるな！」

「了解！」

「また回りこみか？ さつきと同じ作戦かよ。」

接近するゴーレスに、柏木は尾びれを強く振つてはたき

こもうとした。

バシン！

ゴーレスは腰をかがめて、右肘と膝で尾びれを受け止めた。

「二回目だからどんな変拍子もリズムが読めるんだよ！」

音楽に乗つた舜は調子づいていた。ゴーレスはワイヤーを尾びれに結びつけた。

「しまった。後ろにワイヤー……岩に結びつけられているのか！」

天然の大岩に、ワイヤーの一端が結び付けられていた。

「船越。こっちは大丈夫か？」

「アンカーを地面に刺しました」

「荏田さん！」

鵜飼が投げたワイヤーを空中のリザードマンが受け取り、急降下して、投げ縄をしたワイヤーがナポレオンの首にひつかかった。

リザードマンは首をひっぱつた。正面と後方をワイヤーで固められた。

荏田は叫んだ。

「いまだ、舜。ドリルを背中に打て！」

「柏木さん、そろそろいきますか」

「予定通りに行く」

背中にドリルを付きたてようとした時、煙がナポレオンの脇から上がり、周りが見えなくなった。

「舜！ 赤外線と3Dソナーにすぐ切り替えろ！」

裕一は叫んだ。その瞬間、ゴーレスは2本の左腕に捕らえられた。

いや、見えない粘着質の感覚がゴーレスを締め付けて、それが左腕に取り込まれたことを舜は理解した。

粘着の『半物質』！ これはこいつの能力か。初めてだ。

僕以外にこれができるなんて……。

「これが俺の潜在スペックだ。田中、フルパワーでワイヤーを振り切れ！」

田中はアクセルを吹かし、アクチュエーター加圧率のメー

ターがレッドになるのを確認した。同時に過剰熱損傷率が表示され、正面モニターには通常より多いパラメーターが表示された。

みずきは画面右下の砂時計と数字に気がついた。

上の00:03:00は多分、ヨンヒに機体を渡すまでの時間。

砂時計は別の意味を示しているんだわ……。ゴーレスは、

もがいて、覆いかぶされた

「ちくしょう。体が動かない。荏田さん、今が逆にチャンス。俺が落としたドリルで攻めて！」

荏田は走りだし、ドリルを拾い背中を狙つたが、尾びれの攻撃と背びれから発射されるミサイルに接近を妨害された。

みずきは心をイメの渚に落とした。

夕暮れの秋の田園風景が、彼女の心の『デスクトップ』といつてもよい。

風の中でみずきは手を広げ、眼に見えるイメージを伝えた。

これで舜と裕一に届くはず。

舜、あなたの力はこんなものじゃない！

リザードマン、そして『ハヤブサ』の膝まで水に浸かる海上で、ナポレオンは必死にもがいて抵抗した。大岩と結び荏田、鶴銅、船越は尾びれに取り付き、胴体の揺れに弾き飛ばされながら隠されたエンジン部を見定めていた。

「奴が『しつぽ切り』をする前に俺がジョイントを外す。中を撃て！」

荏田がステイクドライバーで尾びれのジョイントを取り外すと、中にスクリューが露出された。

「やりやがったな、よし。80%の推力で飛ばす」

ナポレオンはしつぽを切るタイミングを外したが、ジエットスクリューが急速回転した。その衝撃でリザードマンたちがナポレオンに取り付けたワイヤーが外れた。しかし即座に『ハヤブサ』は両腕横の重機関銃から残弾を撃てる限り打ち込み、ジェットの回転は火を噴きながら止まる。

画面に裕一が現れた。

「あと少しだ。奴が拘束につかっている『半物質』は、能力のタイムリミットと共に消える。わかっているだろ、舜。拘束は解ける！」

「奴のコクピットが見える。柏木は苦しんでいる。もうすぐ力が切れる」

「俺にも見えるぞ、舜。俺達は、みずきの見ているものを

見ている」

「ヨンヒ！ここまで来たんだ。お前のタイムリミットには間に合つただろ。早く来い！」

こめかみに筋を立てて念を込める柏木は歯軋りしながら言つた。ヨンヒは涼しい顔で応対した。

「黙つてろ。ギリギリの水深まで進める」

沖合いのアノマロカリスが海岸に近づくのを、姿は見えずとも、その白波によつて確認された。

「あなたの力の限界、もうすぐですね」

柏木からは、みずきの皮肉に応対する余裕すら無くなつていてた。

橋武丸は独断で工作員に指示した。

「ゴーサインを出したら本島南方で演習している護衛艦

『たいしやく』のトマホークを発射せしろ」

橋は頭龍オリジナルと思しき機体が敵の手にわたることを避けたかった。

リザードマンの流出より、これが重要だつた。

壊しても部品さえ手に入れればいい。あれは張りぼてではない。

70年前の荒唐無稽な人型兵器は現在のアクチュエータ

一より、はるか上の性能のはずなのだ。

あの凶面から始まる、我々の計画の主軸を重工から橋へとシフトしなければならない。

70年前に、あれを作ろうとしたのは我々橋製作所なのだ。

だ。

4本の腕と半物質の粘着に絡まれたゴーレスは、いまだに身動きが出来なかつた。

「田中、足が壊れても走れ！」

柏木は叫んだ。ナポレオンの足に、『ハヤブサ』2機が取り付く。

『ハヤブサ』の装甲板がナポレオンの蹴りで、へこむ。

「絶対離さん。船越、よいな」

「鵜飼さんについていきます」

振動緩衝系の限界をはるかに超える大きな揺れの中、二

人は必死で耐えた。

彼らを引きずりながら、沖合いに向けてナポレオンは進んだ。

桂田は背中の上で手甲部の装甲を使ってパンチを繰り返した。

「貴子！エビの3Dソナースキャン進めているか？」

「大型エビの距離200m。次第に接近しています。敵ワ

イヤーガン推定射程まであと20秒。」

「舜、もつともがけ！お前のスピードならできるだろ！」

舜は3機の奮闘を目にして気持ちが高ぶっていた。

早くしないと援軍にやられる。機械的にこれ以上、がんばれない。

後は気持ちなのか。俺の術。俺の術はあれか。ゴーレスを作り上げた術。

自分が生まれたところから続いた術、造物力。

△誰かが傷付く前にお願い。舜▽

みづきの声が聞こえてきた。

障壁を作つて、あの大型エビと分断させる。舜は操縦桿を離して、両手を合唱させた。

△みづき、『神』を作る。器（ツホト）の神だ▽

△わかつた。二人の術を重ねるんだね▽

△クピット正面の龍の眼が光り、ゴーレスの魂に繋がつた。

△僕らの力を数倍、数十倍にしてくれ、ゴーレス▽

△了解』の意思を伝えるように、龍の眼は点滅した。

裕一の手元のウォドパネルから同心円の光の波が眩しく

光りだした。

△力を使うんだな。舜、みづき。』

舜のイメージにある絶対に超えられない壁、硬い城柵。

△突き立つ柵▽

△来るなどいう意思▽

二人は気持ちを重ねた。

△△出でよ、ツキタツフナドの神▽▽

△尖った半透明の氷のような柱の障壁が、海から生えてくる。雨の後の竹の子のように、海から続々と立ちあがる壁は海岸線に沿つて、数キロにわたつてこの海岸を囲い込む。

△ヨンヒのアノマロカリスから発射されたワイヤーガンが、弾き飛ばされた。

△づく